

すごろく 双六からみえる常陸大宮の町並み



佐藤 美弥
埼玉県立文書館学芸員
近現代史部会専門調査員

近現代史部会では、まず合併前の町村史などに学びながら、新しい常陸大宮市史では、どのような特色を出すか、どのような組み立てがよいかを議論することから始め、本格的な調査に着手しようとするところです。

部会での議論で一致していることは、常陸大宮に生きた人々の気持ちや行動が具体的にわかる、「顔のみえる歴史」を、ということです。一口に地域の歴史といっても、様々な側面があります。政治や行政、経済や産業、そして生活や文化。とりわけ生活や文化のようすは人々の日常に近いだけに、意識的に記録が作られることが少なく、なかなか後世に伝えられません。そこで様々な資料にあたっていく必要があります。

さて、ここに旧大宮町の商店を掲載した双六、「大宮町協同商店写真集双六」があります。【図】



【図】大宮町協同商店写真集双六（市教育委員会蔵）

23の商店の写真がはめ込まれたコマをめぐる最後に甲神社で上がりとなる趣向です。地域の中心的な商業地だけあって3軒の宿屋、2軒の料理屋が掲載され、また醤油醸造所、薬品店や書店、そして自転車店なども載っています。土蔵造の店舗もみえる一方で、茅葺きの建物もみえるといった町の風景や店先の様子まで分かります。

問題は、この双六はいつ頃作られたのか、ということです。欄外に「写真師檜山静峰」が発行し、「水戸市南町大正印堂」が印刷したとありますが、残念ながら発行年月日はありません。コマのなかにヒントはないでしょうか。7番「満寿屋料理店」には「専売所側」という説明があります。「専売所」とは、1897（明治30）年に設置された、葉たばこの専売所のことでしょう。どうやら明治30年代以降に作られたもののようです。次にそれぞれの写真を見てみると、22番の「黒澤書肆」の写真には書店の店先に立て看板があり、ほんやりと「全科表解」と書いているように読めます。国立国会図書館のデータベースで調べてみると、「全科表解」とは子ども向けの学習参考書で、同館には1910（明治43）年から1913（大正2）年のものが所蔵されています。同書はその後、昭和の初め頃まで出版されたようです。

こうして双六が作られただいたいの時期を推測できました。当時、この双六は地元の商店がお金を出し合い販売促進のためにお客さんに配布した生活に身近な「ちらし」のようなものだったのでしょうか。それが約100年経過した現在、かつての町並みを記録し歴史を語る貴重な資料となっているのです。

探しています！
古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。
お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎ 52-1111（内線 344）